

投稿

星景写真展「時空の地平線」報告

～星景写真による天文教育普及の可能性～

大西浩次（長野工業高等専門学校）

1. はじめに

天体写真のなかでも地上の風景と一緒に写しこんだ星空の写真は、不思議と心の安らぎや安心感が得られる。これは、宇宙の神秘に触れると共に、我々が地球上に存在していることが実感させられるからであろう。今年、世界天文年の企画として全国(船上を含めて)4カ所で、大西浩次・星景写真展「時空の地平線」の巡回展を実施している[1]。ここで、現時点での途中経過を報告したい。



写真1 倉敷科学センターでの展示の様子



写真2 黒部市吉田科学館でのギャラリー・トーク（2009年5月3日）の様子

2. 天体写真

人はどうして写真を撮るのだろうか。ひとつに、事象の記録のためであろう。しかし、きれいな風景にであった時に、思わずシャッターを切っているのはなぜだろうか。それは、風景を撮影することで、自分の感動や自分自身のその置かれている状況（旅行中だとか登山の最中だとか）など、自分の共有した時間を記録するためであろう。ただ、このような風景の写真を見せてもらっても、撮影状況の知らない第3者からすれば、単に風景が写っているだけの絵はがきの写真でしかない。

それでは、もっと自発的にカメラを持って撮影している人たちは、なぜ撮影しているのだろうか。それは、ひとつに風景を通して自己の表現をしている（心象風景）のだろう。我々は、このような風景の写真を、風景写真と呼んでいる。要するに単に風景が写っているだけでは風景写真ということは出来ず、その写真から明らかに撮影者の強い意図がわかるもの（少なくとも撮影時における撮影者の強い意図があるもの）を風景写真と呼んでもよい。

さて、人はどうして天体写真を撮るのであるだろうか。これも、天文現象の記録から来るものが一番であろう。時に天体観測として写真が使われ始めてから、長時間露光やフィルター、分光から多波長にわたる観測を行い、目では見えない現象を写し取るという手段として活用されてきた。（現在は観測装置としては冷却 CCD カメラに取って代った）。

天体を対象とした場合、それ自体が美しい対象であり、かつ、ロマンを感じる対象であるため、科学写真としての天体写真の中にも、

思わず芸術写真のような美しさを感じることもある。だからであろうか、星野写真とか Deep Sky とか言われる望遠鏡を使った写真では、特定の対象が撮影者（ハイアマチュア）の強い意思で繰り返し撮影されている。

場合によっては、撮影技術がその人の表現であると思われるふしがあるのかもしれない。しかし、我々は日々の生活の中で、星を対象とした、いまだ、撮られてこなかったような写真がある。ここで、星景写真を紹介したい。

3. 星景写真

星景写真とは、風景と星空を同時に撮影することで、単独の星の写真とは異なる相乗効果を考えた写真ジャンルである。ここで、もう一度強調したいこととして、風景を写しただけで風景写真といわないように、星と風景が同時に写っているだけでは星景写真とは呼べないことだ。星景写真は撮影者の強い意図によって撮影されているからだ。天体写真と星景写真の違いを表1にまとめてみた。これを見てわかるように、星景写真は星空と風景を同一画面に収めながら、作者の心象風景を写しだす写真だ。

表1 天体写真と星景写真

天体写真	星景写真
天体を対象にした科学写真、科学的情報を取り出すためのデータ	星空と風景を同一画面に収めながら、作者の心象風景を写しだす。
はるか遠き宇宙の画像はロマンティック！だが、芸術でない	個性の表現が可能な写真
天体写真のプロはプロの天文学者	星景写真はこれからすべての人に開かれた分野

4. 星景写真の歴史と日本星景写真協会

星景写真というジャンルは、いつ頃できたのであろうか。少なくとも1980年代後半には、星景写真を意識的に取り始めているメンバーや小グループが活躍し始めている。この時代にはそれぞれのグループが、「星の風景」とか「星空の風景」などという、いろんな呼び方で呼んでいたが、1988年「スカイウォッチャー」編集長、川口雅也氏により「星景写真」という名前が提唱され、次第に、この名称が使われるようになってきた。

1997年の天文教育普及研究会中部支部会（富山市天文台にて開催）で一部有志の交流が始まり、それから約10年後の2006年日本星景写真協会が設立した。2008年1月より日本星景写真協会のメンバーによるグループ巡回写真展を全国各地の学習生涯施設や科学館、美術館などで開催している。

表2 日本星景写真協会巡回展

年	日程 (初日、終日)	会場
2008	1月12日 4月6日	倉敷科学センター
2008	4月24日 6月1日	山口県立博物館
2008	9月27日 10月26日	千葉市科学館
2009	1月30日 2月5日	富士フィルムフォトサロン名古屋
2009	3月20日 5月24日	富山市科学博物館
2009	7月4日 9月27日	入江泰吉記念奈良市美術館
2009	11月7日 11月29日	明石市立天文科学館
2009	11月7日 12月7日	姫路科学館

この巡回展の箇所も現時点で7カ所目となり、多くの人々に星景写真を楽しんでいただけたと思われる。この詳しい話はいずれ会長より報告されるでしょうが、ここではこれまでの巡回展の日程と会場のみを表2で紹介しておこう。

なお、現在、2009年11月29日まで兵庫県明石市の明石市立天文科学館、2009年12月7日まで兵庫県姫路市の姫路科学館で巡回展が行われている。

5. 星景写真による天文教育普及の可能性

星景写真は、風景と星空を同時に映しだし、単独の星の写真（星野写真など）とは異なる相乗効果を目指しています。特に、この地球上から見上げる星空は、時には雲があったり、霞があったりして、かならずしもクリアーには見えるとは限りません。

しかし、これらは地上を意識し、大気の底から星空を見上げていることを、写真を見ている人に強く意識させてくれるでしょう。場合によっては、はるか遠くの星に思いを馳せてくれるのではないのでしょうか。そのような意味でも、星景写真は、天文学への誘いの親しみやすい入り口になるのではないのでしょうか。また、星景写真は望遠鏡や冷却 CCD カメラのような特殊な技術が必要としていません。現在のデジタル1眼レフカメラを使えば、誰でも手軽に撮れることも重要な要素です。

星景写真は、通常为天体写真より、一般の人々に興味を持ってもらいやすく、天文の話始める「つかみ」として最適でしょう。また、プラネタリウムの番組などで使うにも撮影者の心象とうまく一致する場合には効果的な使い方が出来ると期待します。

6. 星景写真展「時空の地平線」

6.1 印刷による作品

世界天文年の今年、その企画として星景写真展の依頼を受け、星景写真を撮り始めて実に20年目にして、初めての個展を行わせていただくことになった。とはいえ、手持ちの予算にも時間にも限りがあり、大型インクジェットプリンターによる1m×1mのプリントによる展示を考えた。ここで、展示場のサイズより枚数は20枚（現在、25枚）の展示となった。印刷には超光沢紙の使用を考えたが、あえて版画用の用紙を採用し、「版画のような写真」を目指した。この結果、オリジナルのダイレクトプリントと全く異なる作品群となり、写真により善し悪しの差は出たが、ほぼ予想通りの作品と成った。

6.2 「時空の地平線」



写真3 “Silence Trees I” 戸隠にて

月や星は古代より信仰の対象であった。その孤高とも云うべき光は、時に恐怖さえ感じる。

都会の光の中に没している月は、ひとつの明かりぐらいとしか気づかない。

しかし、ひとたび、人里はなれたところで見る月の輝きは、圧倒されるばかりである。

月が木々を照らし、山の陰影を刻み、明かりと共に刻一刻、地上の風景を変えてゆく。



写真4 “Vega on the Lake”
ニュージーランド、マウント・ジョン天文台にて

-----永劫-----

その響きが心の中を占めてゆく
月と地球の繰り返される永遠の時間
われわれ生きるものを拒むような永久の時間
月明かり・星明りの持つ厳しさと静寂観

私が望んでいたのはそのような、孤高の輝き、
水面の反映、・・・そしてその静寂な時

私が見た光景は、ニュージーランドの氷河湖
を作った丘の上で、
あるいは、戸隠の山の中で、あるときは朝焼け
の立山、あるいは月明かりの夕暮れ。

私が聴き、感じ、そうしてスケッチしたこと、
これらの作品は、月や星と地上の光景が
織り成すある意味では私の心象スケッチです。

6.3 巡回展

これまで、4つの機関の協力で巡回展を実

施してきた。これらを表3にまとめる。

表3 大西浩次・星景写真巡回展

年	(初日、終日)	会場
2009	3月7日	倉敷科学センター (岡山県倉敷市)
	4月26日	
2009	5月1日	黒部市吉田科学館 (富山県黒部市)
	6月14日	
2009	7月20日	「ふじ丸」、兵庫県立大学 公開講座にて(太平洋上)
	7月25日	
2009	8月15日	長野市博物館 (長野県長野市)
	11月23日	

7. おわりに

今回の巡回展では、ギャラリー・トークと共に、天文講演会などを行い、「星景写真」を使って天文学への関心が向上するか調べたいと考えている。しかし、現時点では天文教育にどのくらい効果があるかわかっていない。できれば、今後も巡回展を続けると共に調査を継続し、天文教育への活用を見いだしたい。最後に、巡回展に当たり、展示の制作・準備にご協力いただいた、倉敷科学センターの三島和久さん、黒部市吉田科学館の西田弘輝さん、「ふじ丸」の皆さん、長野市博物館の大蔵満さん、関係者の皆さんのご協力に感謝します。

参照

- [1] 星景写真展「時空の地平線」のHP：
<http://www2.nagano-nct.ac.jp/~ohnishi/SpaceTimeHorizon1/>

大西浩次